



2022年3月3日放送

印象に残る症例①

妊娠をきっかけにパニックになった ADHD 症例

スタジオリカクリニック 院長 田中 理香

今回は、漢方専門医でなく、漢方処方に精通しているわけでもない精神科開業医が、漢方ワールドのスピリチュアルな側面、特に女性患者さんの治療について、題して『スピリチュアル漢方体験』とでも呼ばせていただくお話をさせていただきます。

初回の本日は、私にとって忘れられない症例第1回、『妊娠を契機にパニックになった30才ADHD女性』をご紹介します。

3人兄弟の第1子、長女として生まれ、父はIT専門職、母は医療関係の仕事をしており、弟、妹共に公務員をしています。長身で、もともとやせ型、貧血傾向で、腎虚タイプ。

高校卒業後、自衛隊に入隊しましたが集団生活に馴染めずに半年で除隊。その後不眠を抱えつつ活動をする躁状態の後、うつ状態となり、精神科を受診し統合失調症と診断されました。その後大学に進学しましたが、大学3年時にうつ状態のため退学。この時は自分を責める考えが強く、幻聴もあったようです。仕事についても長続きせず、やっと正社員になったものの、結婚して夫との生活リズムが合わないことから調子を崩し、休職することになりました。

その時点で妊娠も判明し、X年9月に当院へ転院となりました。

初診の時、患者さんは「うつで休職中なのに妊娠したんです！どうしたらいいんですか？私って最低の人間です」とあたかも妊娠したことがとんでもない悪い事をしてかしたかのよう、興奮していたことが印象的でした。

前医が知人のうえ、産婦人科主治医も知人ということもあり、引き継ぎがスムーズだったところは、とてもラッキーでした。

実は初めの病名は統合失調症でしたが、その後双極性感情障害、いわゆる躁うつ病と前医は考えており、これから ADHD の診断をつけるかどうかを検討していたとの引き継ぎがありました。そこで妊娠中でしたが、本人の強い希望もあって心理検査と詳しい聞き取りを施行して、X+1年2月に ADHD と確定診断しました。

転院時は妊娠初期で、つわりがひどく、半夏厚朴湯を処方したことで少し落ち着き、この漢方薬との最初の出会いが、体調不良に振り回されてきた彼女の人生の転換点になりました。妊娠は順調で、予定通りに 38 週で自然分娩、3,400 g の男児を出産。出産後という状況も踏まえ血液というよりは生体の物質的側面を支える液体が不足している状態であるところの「血虚」と判断し漢方薬の四物湯を処方、妊娠中より希望されていた ADHD へのアトモキセチン投与も開始しました。

一時的にはメチルフェニデートも併用しましたが、合わないとのことで、現在もアトモキセチンを服用しています。アトモキセチンによって、集中力が良くなり、仕事の効率が上がり、段取りが良くなった分、パニックになることがなくなりました。彼女は、感覚過敏もあって、特に人が歩いていると本人の言葉では、オーラが見えるので煩わしく、そのストレスから自律神経症状が出るという問題がありましたが、ADHD の薬と多彩な漢方薬を使うことで体調管理が可能になってきたことを、この頃から実感され始めました。

里帰り出産をして実家に滞在したままだったため、以前よりすれ違いのあった夫との関係はどんどん悪化しました。そのため、夫との話し合いの後に体調が悪くなることもあり、抑肝散加陳皮半夏を処方することが増えました。

1 年後には ADHD の状態も安定し、当院リワークに通いながら体力アップを心がけるようになりました。また、実家のサポートもあり保育園に子供を預けて復職することもできました。現在は正社員として通常勤務しながら実家で子育てをしているところです。仕事が順調になってから、夫とは離婚して、精神的には穏やかな状態が保っています。

この患者さんには、いろんな漢方薬を使ってその都度対応してきました。先ほども申しましたが、妊娠出産期には母体のダメージの大きさも考え「血虚」「お血」を改善する四物湯を、復職の前後には前向きな気持ちをサポートするために「気血両虚」の十全大補湯を、苛立ちを感じたときは抑肝散加陳皮半夏を使用しました。離婚前後の体のだるさには補中益気湯を服用しつつ、自分自身にも元気になるように言い聞かせていました。これらの漢方薬以外にも、その時の訴えによって加味逍遙散、葛根湯、五苓散、柴胡桂枝湯など数えてみたら 11 種類の漢方薬を使い分けていました。

漢方薬にもこむら返りに使われる芍薬甘草湯のような即効性のあるものがあります。一方、少し長めの投与が必要になる漢方薬には体質改善や体の抵抗力の回復を目指したものがあります。そのようにいろんな漢方薬がある中で、この症例を通して印象的だった漢方薬が2つあります。1つ目は抑肝散加陳皮半夏です。この患者さんはとても衝動的でイライラも強く食欲不振をきたしやすい方でした。興奮症状が強かったため加味逍遙散ではなく抑肝散加陳皮半夏を投与したところうまく感情をコントロールできるようになりました。この薬のおかげで、自分でも感情コントロールは可能だという自信を持てたことは大きな収穫でした。

もう1つは、半夏厚朴湯です。つわりの症状への効果を患者さんが実感したことで漢方薬への信頼が得られ、その後投与した漢方薬もスムーズに受け入れてもらえるようになりました。

20歳で統合失調症といわれ、現在はADHDの確定診断となったこの患者さんは昔から「自分は価値のない人間で死んだほうがいい」と思うことが頻繁にあったようですが、何とかシングルマザーとして子育てをしながらフルタイムの仕事もできるようにまでなり、子供が可愛くてしょうがない話をしてくれます。最近ではトラブルに対しても自立した冷静な対応ができるようになり、パニックになってもすぐに落ち着き、引きずらないようになってきました。

漢方に精通しているわけではなく、患者さんの状態に合わせて私なりに漢方薬を選んで使ってきました。この患者さんの場合、自分で効果を実感できた最初の1つの漢方薬との出会いがその後の安心感につながり良好な状態に寄与したと考えています。この企画の準備段階で本人の許可を得るためにお話をした時、預金が増えて嬉しいことや不具合があってもセルフコントロールできるから心配ないこと、漢方と主治医のアドバイスがあれば、これまでのように「誰かが悪い」とか「自分が悪い」と責めることなく、不調は改善できると認識できたことは大変有益だったと嬉しいコメントをいただきました。漢方が心の余裕につながり、スピリチュアルな気づき、「自分はここにいて良い」という自己肯定感につながった症例でした。

まとめです。

今回は、妊娠を契機に漢方治療に出会った症例でした。自分の身体と感情を観察することで、環境に振り回されパニックになることが減り、自尊感情が高まりました。気虚・血虚に処方される漢方薬は体調を整えるだけでなく、自尊感情の改善にもつながり得るという経験をした症例でした。